

教育課程と子どもの学力・評価

「確かな学力」を獲得していく過程を見
つめ、子ども・学校・地域の共同が創り
出す教育課程を目指して

中山 晴生

一 はじめに

昨今の教育政策の中、現場の生々しい「爪痕」が語られた。そんな中でも子どもの発達・成長を支え、自主性を大切にし、学校と保護者と地域の共同をつくるという視点をはずさない議論となった。

二 報告の概要と討論の様子

報告Ⅰ 親のてのひら・子どものまなざし

↳ 「言語活動の充実」を乗り越える↳

釧路市立興津小学校 笹本裕一

算数の学習で、生きてきた軌跡に結びつけて十才を秒に換

算してきた子ども、理科の学習で、太陽系の惑星を身近なものに置き換えることで、実感としてとらえ、感動する子ども、家庭学習で、学習内容を4コママンガに作りかえていく子どもなど、自分の身に引き寄せ、生活に根ざした学びによって能動的になる様子が生き生きと報告された。そして、自分の生活に引き寄せた学びは、子どもたちが本来持っている知的好奇心を呼び起こし、どんどん広がりを見せていった。中でも「自分は頭が悪い」と自分で決めつけ、授業中ほとんど発言しないAさんは、このようなことがきっかけで、苦手だった漢字にも意欲的になり、習得していった。そこには、担任の受容的で、子どもが安心感を持てる「言葉」の励ましがあつた。

また、学び方の中で、「共同の学び」は、とても重要であると述べている。子ども同士で、協力して学んだり、調べられないことは劇化しながら共同で学んでいくことは、もちろんだが、家族の協力をも視野に入れた共同の重要性も語られた。氏の報告は、子どもの日記や作文を基盤にし、子ども理解を丁寧にするものなのであつた。それゆえ、「表現すること」の重要性が際立った。

自分の身に引き寄せて学び直す授業づくりを中心にした学びは、子どもの能動性を引き出し、知的好奇心を誘発している。

その子の発達成長に寄り添った実践になっている。点数に前のめりになりがちで、学習が鍛錬的にシフトする昨今、等閑になりがちな子ども目線からの問いを大切に、子ども自らが考える授業づくりの重要性も示唆していた。特別なことではなく、今、使っている教科書の中から、子どもの「葛藤」や「揺れ」が出るようなところを教材研究の中でも見つけ出し、そこに「楔」を打ち、そこから広がるような授業を展開していくことの重要性もあらためて問われるものとなった。氏の報告は、様々な示唆に富み、子どもの発達に即した学力形成過程を可視化するような報告であった。

報告II 言葉を獲得すること―国語学習―

檜山管内乙部町立栄浜小学校 鈴木真弓

特別な支援を要する子どもを担当し、その子の息づかいを聞きながら、試行錯誤で実践し、自らの言葉を獲得していく様子が語られた。その中で鈴木氏は、反復練習は大切であるが、単にそれだけでは言葉を獲得できない。生活に根ざしたものの、体験からつかんだものが、自分の言葉になるとまとめた。そして、その身についた言葉を駆使し、自分の思いを表現することは、その子どもをさらに意欲的にさせ、日常生活をも変えていくことになったと述べた。この様々な広がりを見ていると、借り物ではなく自分で身に付けた言葉を獲得することが、人間の生活

をいかに豊かにしていくかがわかったような気がする。と心情も語られた。

鈴木氏の実践報告もまた、言葉という概念を実生活と結びつけ、子どもがそれを獲得していく学習過程を大切にしている。ある。「言葉」が、自分にとつて必要なものになっていくことで、能動性も誘発し、世界が広がっていく。

また、言語は慣れが大切であると言われている。その言語をシャワーのようにたくさん浴びると習得が早いという報告もある。その意味で英語の早期教育は是非かという議論があった。「母国語と同時に学ぶのか、母国語をしっかりと学んでからでもいいのか」という議論の中で、「言語は単に、ツールとしてだけでなく、人格形成の『内言』としてみることも重要」という指摘があった。

報告III 教育の質を共有する文化へ

「語り」が持つ「教育」の可能性

檜山管内江差町立南が丘小学校 中山晴生

檜山でも最近「キチンと」「チャンと」や点数に閉じ込められている子ども、教職員、保護者が多い。また、「十把一絡げ」で、子どもたちを見る傾向も強まっている。しかし、子どもの

語り（綴り方）や保護者や教職員の語りに耳を傾けると、キチンとできる見栄えやキチンと点数がとれることも大切だが、それよりも大切なものがあると、しだいに語られてくる。聴き取り、聴き取られる関係の中での「語り」はやがて、子どもの固有名詞になり、「その子の発達・成長にとって、大切なものは何か」ということが共有されていく。檜山に根ざした「ふるさと学習」が生まれる背景には、そのような「語り」があり、また、そこから生み出される。医療の世界でも最近NBM（ナラティブ・ベシック・メディスン）が注目されていて、患者の「語り」を治療に生かす取り組みが行われていることも語られ、「語り」の重要性が報告された。

担任の意向は、学級を専制的な空気感にすることがある。とくに、失敗はしてはいけない。キチンとしないといけない、キチンとしないといけないといったようなことは、子どもたちが必要以上に付度し、張り詰めた学級の雰囲気になることがある。そんな中、自分の弱さや失敗をありのまま見せる子どもがいる。それを担任がどのように受けとめ、成長発達の課題にし、子どもたちと共有していくかが重要である。その成長発達を支える教師の受容的なまなざしは、子どもたちの心を解放し、安心感を宿し、子ども本来の姿を取り戻す。そのまなざしがこどもたちのありのままに近い綴り方を呼びおこし、借り物でない言葉

が生まれてくる。それは、「自分の頭で考える」土台になり、子どもたちの成長発達に欠かせないものになる。

報告Ⅳ やるべきことは何なのか

雨竜町立雨竜中学校 大竹宏周

算数・数学の巡回指導教員としての報告である。その会議では、「平成二十六年の全国学力学習状況調査（以下「調査」）には、全国平均以上に」が頻繁に出されるそうだ。そのことは、子どもたちにも浸透し、小学生でも「これはテストに出ますか？」という発言も頻繁に漏れてくる。テストに出るところを勉強するということにだけ、学びが閉じ込められてしまっている感がある。知的好奇心よりもテストの点数を上げるために勉強をしている雰囲気もある。

「調査」の問題を解いてみたが、教科書を逸脱するような問題はなかった。しかし、教科書をそのまま扱うだけでは、正答が得られないものがある。とくに「活用」の問題は、それを扱う時間とそれ用の授業確保が必要になる。本来、「調査」の目的は、大まかに言うと、状況を分析し、指導の改善を図るものである。今はどうだろうか。平均点を競うものになっている。「教育の機会均等」は本来どういう意味なのだろうか。行政は

今一度「教育の機会均等」の意味をかみしめ、現場の教職員は、児童・生徒とふれあい、分析し授業を改善していくことが大切である。

「調査」の全国平均点以上に向けて、あからさまに点数を上げるためのものが目白押しになってきていることが報告された。それが各学校に浸透し、過去問の徹底、テストに合わせた授業づくりがまかり通っている。「学びからの逃走」(二〇〇〇年佐藤学氏)を今一度考える必要があるのではないか。子どもも教師も学習が苦役になってきている現状がある。また、意欲や満足度などを測るテスト(QUテスト)も導入され、その結果も問われ、どうやってその点数を短期的に上げるかを悩んでいる現状もある。教育には時間がかかる問題もある、いや、教育は時間がかかるものである。しかし、すぐに結果を求められる。学校現場に「教育」とはほど遠い形で重圧がかかっている。

報告V

生徒・保護者との共同の教育課程づくりを目指して

く富良野高校における授業評価の取り組み

北海道富良野高校 松代峰明

全国の学校に新自由主義教育の嵐が吹き荒れ、教職員評価制

度や情報提供制度などは、教職員同士、教職員と生徒、保護者や地域と学校の分断につながってきている。その対抗軸は、やはり、教職員同士、生徒と保護者との共同である。「授業評価」は、「教員評価」に結びつけられる。個に押し込められ、自己責任が問われるものになっていく。富良野高校では、そうならないよう学校評価推進委員会が組織され、三点が強調された。

①教員個人の自己責任にしない評価をすること。そのために、授業評価を指導力の向上・改善は学校全体として、集団的・組織的に継続性を持って取り組むことを共通認識とした。②受験学力だけでなく、そのために、人格の完成の基盤となる学力保障についての評価にすること。改善アンケートを工夫し、項目に「自分にどのようなことが身についたと思いますか」や「生徒に考えさせるようにしてくれていますか」などを入れた。③生徒と教員との双方向的な評価をする。そのために「授業の在り方・受け方」をテーマにHR討議を行い、その討議を踏まえて、教員と生徒がこのテーマの懇談会を行うようにした。これには、一〇年前から行っている、「教育についての情報を共有し、相互に評価しながら共同していくことを目的としたPST(保護者・生徒・教師)懇談会」の取り組みが生きてきている。

教職員間で授業を見合う大切さがあらためて確認できた。生徒は「学校」という組織で教育を受けている。保護者も「学校」

という組織に預けている。教職員も「学校」という組織で勤務している。決して個人ではない。それゆえ、さまざまな改善は、「学校」という組織として集団的に継続的に行われることは道理が通っているし、組織が改善されていかないと本当の授業改善にはならない。「評価」は、システムとして分断される性質を持つている危険性がある中、教育条理と道理を大切にしながら今回の「授業評価」の取り組みは示唆的であった。

二 総括

年々現場は困難を極めている。その中で、どの報告も子どもを見つめるまなざしが優しく、教育にとつて大切なものをつかんで離さないものであった。そのしなやかさは、民主教育の蓄積に支えられていることが垣間見られた。今後も研究者と一緒になって「人格の完成とは?」「学力とは?」という論議を深め、地道に、そして、したたかに小さな共同からつくっていくことが求められる。

(江差町立南が丘小学校)